

り、妄に論議されなかつたと聞いてゐるが、我が皇室に對し奉る尊崇は甚だ深いものがあつて、御陵に參つても蘆蒲園の上に端坐して御靈の前に恭しく額づかれた。大正十年には、時の攝政宮であらせられた今上陛下御渡歐の際香港で御通譯申上げた功によつて、御紋章入の銀時計を賜はり、また勳四等に叙せられ、其の年の秋御歸朝後には、離宮で拜謁を賜はつたが、御即位式の時にも外人としては唯一人、建禮門前で列立の榮を擔はれた。斯かる數々の光榮は、全く先生の皇室に對し奉る崇敬の精神の果實とも云ふべきものであらう。

更に又、先生は國體明徴の觀念についても、外人間に絶無の認識の持主であつた。これ程の先生が何故日本に歸化されないのかと聞いた者もあつたが、先生は多く答へられなかつた。要するに先生は日本文化を熱愛し、日本精神を理解して、遂に其のあこがれの地たる日本の土となられた正真正銘の日本の親友であると同時に、英國文化の粹たる騎士道精神を體得された一種獨特のクリスチャンであつたのである。

## 本尊美翁を憶ふ

日本郵船會社々長

大

谷

登

客年末東京都上賀茂の私邸で病氣靜養中の本尊美利茶道翁が藥石效なく十二月十日溘焉として長逝されたことは洵に哀

惜に堪えませぬ。十二月十五日同地アグネス教會に於て盛大なる葬儀が営まれましたが、今回林伯爵を會長とする財團法人明治聖徳記念學會の御斡旋によつて故翁の追憶講演會の開催されましたことは我々一同深く感佩に堪えざる所で、殊に林會長始め加藤博士其他の方々より甚大なる御盡力と御配慮を賜はりまして、私は發起人の一人として茲に厚く感謝の意を表する次第であります。

扱而本尊美翁と日本郵船會社との關係は翁の半生即ち過去三十年間に亙る永き期間でありまして、其間翁は渝らざる吾社の大顧客の一人でありましたのみならず、明治三十二年初めて當社歐洲航路の因幡丸に乗船せられました以來六十餘隻の多數の汽船に乗られました親しく當社船の諸設備を批判し、その改善すべき點に就てはいろいろ親切なる助言を惜しまれなかつたのであります。翁は時折貨物船を撰び乗船せられた事も再三ありましたが、これは翁が航海中常に靜寂を好まれ、所謂浴衣掛けにて讀書に耽ることを樂みとせられたのに依るのであります。また翁は晩年我國諸神社の歴史の研究に没頭せられ、全國の官國幣社を巡詣せられました。偶々當社船の大部は神社の名前を奉戴致して居ります關係上、氏の研究による資料によつて當社船名考を執筆せられ、また當社發行の英文雜誌上に篤志を以て毎號寄稿發表せられたのであります。

私が翁と相識るに及びましたのは數十年の昔であります。親しく相接しましたのは昭和三年の秋私が世界一周旅行の歸途坡西土から賀茂丸で歸朝致しました折、偶々同地から翁と日本迄同船の機を得た時であります。御承知の通り翁は日常日本服を着用し日本食を攝られて眞の日本人らしい生活を營まれ、又公式の場合を除き常に日本語を話し日本語で文通せられて居りましたが、賀茂丸が神戸入港の前夜に船中で船客に對する送別晚餐會の催せられました時、翁は

一等船客一同を代表して一場の挨拶があり、矢張り流暢な日本語を用ひられたことを記憶して居ります。

翁が初めて日本を訪問されたのは氏が香港總督秘書に任ぜられた前々年即ち明治三十四年八月といふことですが、それ以前から英領各地の總督秘書を勤められ、南阿、濠洲、東洋諸地に足跡を印せぬ所は無い位でありまして、非常な旅行愛好家で、而も船による旅行を無上の樂みとし萬止むを得ざる場合の外は汽車及飛行機には乗られなかつたやうであります。例へば日本内地を旅行するにしても概ね汽船であり、神戸から横濱へ往復する場合にも常に當社の船便を利用せられ、態々自家用自動車を京都から横濱へ廻し船より上陸するや否や之によりて各地に赴かれたのであります。翁は晩年一年おきに英國まで長途の旅行をせられました。本年は是非當社の紐育航路の新造貨物船により巴奈馬運河を經由して紐育から英國へ渡る計畫を樹てられて居つたさうであります。これは翁の側近の者から承つたことですが、大正八年翁が初めて東京に居宅を定めて日本永住の決心をせられてからは、「英國は訪問するので歸國ではない、日本へは歸朝するので來朝ではない」と常に申され、京都へ居を移されてからは「歸洛する」といふ言葉を用ひて居られたさうであります。この一事は如何に翁が日本に愛著を感じられて居つたかを示す證左で、翁の來簡にも亦翁が生前認めて置かれた氏の小傳中にもその言葉が忠實に表はれて居ります。

翁の學者としての研究と人格に就ては加藤博士のお話中に能く窺はれますが、翁が非常に物事に几帳面で且つ恬淡であつた事實を二三申上げたいと思ひます。翁が永年當社船に愛乘せられますので、その恩顧に報いたいと思ひ多少でも船賃を割引して差上げませうと申出でましても頑として應じられませぬ。「若し郵船會社で船の回数切符でも發行して居るなら私は最初に求めませう」と言つて笑つて申された位です。「自分は郵船會社を最良しても最良顔をしなくな」

といふのが眞の翁の心事だつたと思はれます。仍でいつも専用浴室付の室を割増料を頂かず用意して差上げる習慣になつて居りました。無論雜誌に寄稿されても原稿料など受けられませぬので、時折翁の好まれさうな品を記念として贈呈し、御厚意に對する微意を表して居つた次第であります。承れば香港大學を初め京都府立一中、成蹊學園などで教鞭を採られましたも一切無報酬で、中學生には英作文の時間に優秀な成績の者には自ら褒美を買つて與へられたといふ事があります。

今度私が承つて大に敬服致しました事は翁の日本の爲めに盡された隠れたる功績だと思ひます。それは翁の逝去を知つて京都の私邸を訪問された元臺灣總督府官吏の二老人の口から洩れた美談であります。恰も日清戦役の後清國から割讓された臺灣を例の三國干渉の發頭人たる露西亞、佛蘭西、獨逸が何とかして清國へ返還させようと秘に陰謀を廻してゐる事實を知つた翁は、これは日本の爲めに一大事なりと大に憂慮し、一刻も速に日英同盟を締結して三國を牽制せねばならぬと考へ、早速英國官邊の友人に書を送り、その促進と實現に努力するやう從懇大に努められたといふことであります。

又今回の支那事變に際して英國の輿論がどうも日本に非なる爲め翁の一人人が特に翁の感想を求めたところ、此事件に就ては側近の者にすら一切口を緘して居られた翁は唯一言「今度の事變で日本は實に止むに止まれぬ正義の戦をして居るのだ」と述べられたのみで多くを語らず、そこで友人は「カンターベリー僧正すらあの如く日本に不利な宣言をなして居られるが、是非先生から英國人一般にその非を知らしめて頂く方法はありませんか」と相談を持ちかけると翁は曰く「自分はかゝる事柄に關與する權能もなければ又興味をも持たぬ、これは全く英國人一般が日本の實情に疎きが爲

めであると思ふ、寧ろ日本聖公會の本部から其決議として打電し日本をのみ攻撃することの當らざるを通告するに如くはない」と助言せられたといふことであります。

翁はその半世を東洋の文化殊に日本精神の根源たる我が皇室の尊嚴なる所以並に神ながらの道の研究に専心せられたのであります。元來英國の舊貴族の家柄に生を享けられ且つ英國の官吏として王室に誠忠を誓はれた方でありますから、臨終に至る迄曾て故國に對し不實の觀念を懷かれたことはありません。在世中も常に十字架の章しるしを胸高く掲げ、日曜毎には必ず近くの教會に赴き日本人の牧師を教父と呼び熱誠なる祈りを捧げて居られたといふことであります。従つて死に直面しても何等畏るゝ所なく天國に昇るの樂み自ら面に顯はれ安らかなる永遠の眠りに就かれたと承つて居ります。

危篤の報に接しまして當社神戸支店より郵船診療所の醫師を病床に見舞はせましたる際は最早意識も餘り判明ならず臨終も遠からず見えた際でありましたが、醫師の手を固く握り感謝の言葉を口にせられたのであります。翁の如き眞の理解を有する親日家を喪つたことは返す返すも遺憾至極であります。殊に現下國際情勢の甚しく切迫致しました折、幾多翁の隠れたる遺徳を偲びますると追憶の念は轉た禁じ得ざるものがあります。乍併幸ひ翁の在世中研究せられた遺著は數多ありまして、孰れも我が皇室並に國體の世界に冠たる所以を詳述闡明されたもののみで、之等は末永く貴重なる文獻として晉に外國人のみならず我々を裨益する所大なるものであると信するのであります。微か翁追憶の辭を述べ氏の冥福を祈る次第であります。